

東京都千代田区神田駿河台3-2-11
総評会館1階 原水禁気付
「さようなら原発 1000万人アクション」
実行委員会
電話 03-5289-8224
FAX 03-5289-8223

さようなら原発 1000万人ニュース

第6号
2012年3月1日



再稼働許すな二・一集會に二万二〇〇〇人

二月一日に東京・代々木公園で、「再稼働許すな二・一」さようなら原発一〇〇万人アクション全国一斉行動イン東京」を開催しました。集會には個人参加の方々をはじめ、市民団体や労働組合など約二万二〇〇〇人が参加しました。日本にある原発は全部で五四基。その多くは事故・故障・定期検査で停止しており、動いているのは二基だけです(三月一日現在)。この二基も五月までには定期検査のために停止します。集會では、停まっている原発の再稼働を許さず脱原発を実現しようと、発言者・参加者一同で確認しました。以下に発言録を記載します。

大江健三郎さん
呼びかけ人

昨年九月一九日に、「さようなら原発集會」を開きました。六万人の方が集まって下さいました。そこで福島から参加された一人の女性が、こう話をされたことを覚えていらっしやると思います。

「私たちはいま静かに怒りを燃やす東北の鬼です」。

東北の農民の方たち、漁民の方たちは、長い苦しみの歴史を経験してこられました。近代以前も、近代になってからも、民衆の怒りの表現は様々にありました。古代史から、民衆の抵抗の歴史は描かれています。そうして時が経つにつれて、怒りや悲しみは静まって、東北の人達は美しい民謡の音楽を作られました。作られました。その歌の意味

をよく聞くと、また踊りを目で追ってみると、やはり抵抗の言葉、怒りの言葉を聞き取ることが出来ます。私たちのよく知っている宮沢賢治の詩は、そういう人たちの言葉のリズムを生かしていると私は考えております。

それがいま、改めて大きな悲しみとして、また怒りとして、蘇ってまいりました。

「私たちはいま静かに怒りを燃やす東北の鬼です」という声を直接聞いて、それを活字で読んで、お互いに語り伝える、そしてここに参りました。あの声を、私たちの声として生かしていくことにしたい、それが私たちの願いです。

いま福島の重大事故の分析、報告が進んでいます。私たちは、原発がどれだけ大きい最悪なのか、その危険は将来につながるものとして、いつまでも、いつまでも残るものだということを知っています。

原発が毎日作り出し出している核廃棄物は、これから三〇年、四〇年、さらにもっと長く、積み重なっていきます。地下深くに埋めるといいますが、日本の国土は死をもたらす世界中のプレートが集まっているところですよ。活断層の網の目が、私たちの国を覆っています。地震はいつ始まるかわかりません。最近も、東京では七年間で、あるいは四〇年間で、確率において七〇パーセント、あるいは四〇パーセントの大地震が起こるという報道がありました。私どもは、非常に大きいシヨックを受けています。ところが五〇年の視野で見れば、確率は限りなく一〇〇パーセントに近づくのではないのでしょうか。六〇年、七〇年で見ればなおさらです。

私の孫の世代に、幼稚園の女の子に、この大きな核廃棄物を、そのまま残さなければならぬのです。それを処理する方法は、七〇年後にはまだ発見されていないだろうというの、良心的な学者さんたちの考えです。

これは私たち人間が、決してやってはならないことです。



そしてこの数万年の間、私たちがやらなかったことであります。人類が全て滅びるようなものをそのまま置いておくということ、私たちがいま初めてやっているのです。それはいままで人間がやらなかった最も悪いことではないでしょうか。それは人間としての倫理、モラルの根本に反するものだと、私たちは考えなければならぬと思います。ドイツでは原発を廃止する必要があると、優れた多分野の学者たちが提案しました。そうして彼らは見事な報告書を作りました。その委員会が、ドイツ倫理委員会です。

ツの人間、将来の人間、そしてヨーロッパ全体、世界の人間が、やってはならないこと、なによりも緊急にやらなければならぬことを、すなわち倫理の問題として、原発を取り上げたのです。それをメルケル首相は受け入れました。議会はそれを通しました。そしてドイツは大きな一歩を踏み出したわけです。

私たちがいま日本で、原発を動かせば毎日出てくる核廃棄物の始末もできないまま、それを持つているのです。爆発の危機に陥っていた発電所の大きな水槽に入っている、ウランとプルトニウムの塊があるのです。一三五〇トンという大きな量です。あれを持つまま、私たちは原発を持つているのです。

しかもその原発を、私たち民衆の参加のない、政府の、専門家の、東電の関係者たちの委員会が協議して、今止めている原発を、もう一度活動させようとしています。そうならば、核廃棄物は増大するままです。この国に、この地震の危険に満ちた国に、もう一度事故が起こったならば、私た

ちはこの国を、あるいはこの国人を、保つていくことはできないかもしれません。

ところが政治家も実業家も官僚も、そして多くの人達が、この原発のうやむやな再開を認めようとしている。こういう時に、こういう日本人が、大きな危機の前に、うやむやにされようとしているときに、私たちは抵抗しなければなりません。抵抗とはなにかという、どのような抵抗ができるかという、これは倫理なのだ、日本人が原発を全廃することは倫理であり、それは他のいかなる価値、経済的な価値とか、政治的な価値とか、国力とか、そうした価値を越えて、根本的に一番重要な倫理である、それを守り抜くことではありませんか。そういうことです。

もし希望が明らかにあるとすれば、いま現在はまだ原発を止めたままである、再稼働を行おうとしているけれども、それへの抵抗が起こっているということですよ。

私達は、いまのうちは、子どもたちにこういうことができず、日本人は、私達は、原発

を止めるのだ、それを決意したのだ。子どもたちに、なぜ私たちがそうするのかというと、人間らしさの中で一番重要なことだからです。

小学校で、中学校で、教室で、先生が子どもたちに、私たちは原発をやめました、もうこの国に原発はない、恐ろしい原発の廃棄物に悩むこともない。苦しいかもしれないけれども、停電があるかもしれないけれども、それを越えて、生きていくことができる、先生方が言えると思います。

原発をやめるということを、私たちは決意して、それを実行に移さなければなりません。それが、はっきりと子どもたちに言える希望の証です。

そして、あの東北の静かに怒りを燃やす女性の方も、その仲間の方々も、生き生きとした優しい人間に戻っていたことができるでしょう。そしてわたしは呼びかけ人として、そういう苦しみの中で、困難の中で、鬼にならなくても生きていくことができる、子どもたちはまさにそうだと、いうことを、ここで確認したいと思います。

澤地久枝さん

呼びかけ人

寒いですね。去年の一月二四日に出先で体調を崩してそのまま入院しました。今日も家族に隠れて来たつもりですが、どこかでばれるでしょう。こんなにひどい寒さの中を皆さんよくいらしてくださったと思います。

もうじきあの日から一年がやってきました。あの政府や役所というものはなんで非人間的で無神経なのかと、腹が立って仕方ありません。マスクみだけを見てみると、みんながあきらめて、慣れて、鎮静化してきて、早くも忘れてしまふのではないかという空気をひしひしと感じます。そして、署名も思ったように集まらないという声も聞きます。

出先で、初めて会う方に「あなたは（さようなら原発一〇〇万人署名の）呼びかけ人ですね」と言われました。署名のために、知らない人に声をかけるのは勇気がいると思いますが、やらなければいけないと私は思います。原発を推



進してきた人たちはくり返し、くり返し安全だと言いつつ来てきたじやありませんか。しかし、絶対起きてはならないことが現に起きました。

今、私たち大人が気を付ける。子どもたちに何を食べさせるかということ配慮する。しかし、その先の孫とかひ孫、さらにその先の日本人の命、それから世界中の命。生きとし生けるもの全てです。よね。飢え死にしていた牛だとか、犬とか猫とかというものの、原発のあつた辺りでは小さな鳥が姿を見せないと言います。全ての命あるものに対して、今私たちは物を言える世代として責任を負っていると思

います。どんなことがあつても、原発は止めなくてはならないと思います。

検査をしなければならぬなど、様々な理由で全部止まります。原発ゼロの日が来る。これは私たちがやったことではなく、政府側、東京電力、その他電気関係の業者たちが相談して、日本中から原発が止まる日が一度やつてくるということですね。これは手続き上の問題として実現したということではなくて、そこに有権者である私たちがもう原発は絶対に嫌、原発さようならという気持ちを持って強くアピールしてきたことが、この現実を生んだということを私たちは確認し、同時に政治や企業が動かしている人たちが痛いほど知らなければならぬと思います。

今日みたいな会に、一人でも多くの方々が寒さをおしてやってきてくださるということに、非常に意味があると私は思います。（参加者と一緒に拍手）。本当によくいらしてくださいました。まとまらないことを言いましたけど、でも何とか自信を持って、責任を

持つて、今の私たちの世代にできること、今差し当たってできることは、ともかく原発を止めるということ。

日本は自分の国で起きた事故も收拾できないくせに、原発のノウハウをよその国に売ろうと一生懸命ですね。でも、そういう無責任なことも許せないと思います。

新聞を見ていたら、アメリカはスリーマイル島の事故以来、一つも原発を新しくつくらなかつたのに、オバマ政権の下で新たに原発の方向を決めました。でも、世界は普通の市民レベルで考えたら多くの人が原発は嫌なのです。ともかく事故が起きたときにはもう人が住むことができないですし、風も放射能を運んできます。そういう国籍を超えた人々の意思というものが、結局は政治だとか企業というものを動かしている人を追いつめていると思います。今日の会に意味があつたと私は思っています。本当によくいらしてくださいました。

永山信義さん

福島県平和フォーラム

皆さんなら何と答えられるでしょうか、小学生からの問いかけがあります。

「それでも、原発を輸出するのですか?」

皆さん方なら即座に「とんでもないことだ!」と答えられるであらましよう。

しかし、この原発輸出の問題とともに、再稼働に向けても、肅々と進められていると思っております。

さて、福島県がようやくにして廃炉の態度を明らかにしましたけれども、その矢先に、「時期尚早だ!とんでもない」と抗議をした町長がおります。地方議員選挙で原発推進をぶち上げて、トップ当選を果たした例もあります。残念なことですけど、福島原発事故の起こった地元での出来事であります。これら、巻き返しの動きに細心の注意を払う必要があるだろうと思っております。

次に、マスクミの皆さんにもお願いがあります。鉢呂経産大臣が現地を視察した後に



「ゴーストタウン」の言葉を使い、辞任に追いやられました。原発事故の経過を見て率直に語ったことが辞任の、クビの原因であるとするならば、その原因をつくった人たちが、国やその機関はいつたいたいどうなるのでしょうか。

安全だ、安全だ——念仏のように唱え、湯水のようにカネを使いました。それもそのはず、一部は税金、一部は電気料金として上乗せをして、皆さんから吸い上げたものではありませんか。そうして安全神話をつくりあげ、誘致をされたというかたちを取りながら原発を押しつけ、地震大国である日本に五四基もの原発

をつくりあげてきた、国とその機関、原子力委員会、安全・保安院、関連のゼネコン、そして今もって「このくらい放射能は大丈夫」と公言してはばからない専門家。この人たちは謝罪をしたでしょうか。反省をしましたか。クビになりましたか。もちろん、首をすげ替えて済む話ではないことは明らかですけど、皆さん、どうお考えになるのでしょうか。日本は世界に例を見ないほどの経験をしてきました。ヒロシマ・ナガサキだけではなく、第五福竜丸、「もんじゅ」の事故、JCO。外国での事例ではスリーマイル、チェルノブイリでの事故。そしてとどめは福島事故ではないですか。

学校に転校した例もあります。ささやかな抵抗だと思えますけど、ささやかな努力だと思えますけれども、いま、そういう現状にあるわけです。避難をめぐっても、避難する、しないで対立し、離婚に至った例もあります。また、母と子が郡山から米沢に避難をしました。下の子はすぐ溶け込んで、友達もできました。上の子はなかなか馴染めず、いじめに遭い、帰りたい、帰りたいと言っている。そういう痛ましい話もあります。

絆、絆と叫んでおりながら、その絆を打ち壊したのはいつた誰でしょうか。避難された方々は一様に、戻りたい、帰りたいと言っています。至極当然のことではないでしょうか。国は一月一六日、「収束宣言」をいたしました。これで果たして、「収束」と言えるでしょうか。有機栽培の農家の方が「これでようやく安全安心なキャベツを学校に提供できる」と喜んでいたにもかかわらず、原発事故に遭い、自殺に追い込まれました。「原発がなければ」と、自殺された酪農家もあ



増子理香さん
つなごう、放射能から非難したママネット@東京

本日は素晴らしい集会にお招きいただきまして心から感謝しています。皆様の脱原発、原発活動に敬意を表しております。どうぞ引き続き、福島の子どもを守る活動や、政府の心無い対応に物申す行動を一緒につながって活動してくださるとうれしいです。

私は、福島県三春町から、五月に娘と東京に避難してきたものです。自主的避難者の立場として、一人の母親として、ささやかな思いをご拝聴いただければうれしいです。

黒毛和牛と田と畑をたてる農家に嫁ぎ、自分だけの農業をするため有機農業JASの認定を受けながら、インターネットで全国宅配をしたり、近隣のお宅にお野菜を配達したりしていました。手にはクワのまめをつくり、土と肥やしにまみれたとても充実した日々を送っておりました。

しかし、あの日を境に、私たちの福島は一変しました。国



や県から施行される安全宣言とは裏腹に、驚くような数値を示すガイガーカウンター、自主的な非難を決断しなければならず、同居家族の軋轢を抱えたまま、夫を福島に残し、小学生の娘と身を寄せ合って暮らしています。

四月、小学校に入学した神々しい娘の顔には、白く大きなマスクがありました。文科省から配布された、年間二〇ミリシーベルト以下は安全だという保護者への便り。地産地消の学校給食、そのとき、娘の学校の校庭は、毎時二・二マイクロシーベルトでした。水道水への不安から娘に持たせた水筒は、一滴も娘ののど

を潤すことなく持ち帰られま

した。「学校の水道水は安全だから、水筒を持ってきては駄目」と担任の先生から言われたのです。「ママが水道のお水は危ないから、私、一滴も飲まなかったよ。のどが乾いたけど、我慢したよ」。誇らしげに報告する娘がいました。学校と行政。大人の間で翻弄される、この幼いわが子は、自分で自分の命の選択をしたのです。

五月、被災の証明がないということで、都営住宅やURには受け入れを拒絶され、現在は善意の一般の方から住宅を提供していただき、娘と非難をすることが出来ました。偶然にも一昨日、家主さんが夕食にご招待してください、こうおっしゃいました。「あなたも東京都民になったのだから、子どもさんの新学期の前に、都営住宅でも移られたらどうですか？」。

避難を相談したときの落胆した夫の顔、見送りにも出てこなかった義理の父、荷物をまとめて東京に出てきたころのことが、走馬灯のようにゆっくり脳裏を流れました。私たちは、また、あの日に戻っ

てしまったのでしょいか。

「また、転校だね」ぼつりと言う娘。幼いわが子は、大人たちの中で繰り返される会話を聞き、そしゃくし、子どもなりの理解をしたのです。ひと月の寝床さえままならぬことを。学期途中で転校し、やっとの思いで溶け込んだ学校や友達。永住できないからと何件も受けてやつと決まった職場。あれから一年も経たないうちに、小さな娘に押し付けられる人生の選択は、あまりにも厳しく思えてなりません。

私たち福島県民は、はかない一艘の小船です。さざ波の上をすると流れていく枯葉の小船です。この手にしっかりと携えていたはずのオールはどこかに流され、今握りしめているものは、幼いわが子の小さな、小さな手だけです。この子だけでも守りたい、この子に夢と希望のある未来を見せてあげたい。私たちの願いは、人の親であれば、誰でも思うささやかなものです。これ以上、福島の子どもに悲しみを負わせないでほしい。もうこれ以上、生きる希望や夢を奪わないでほしい。福島

に残してきた自分と、ここにいる自分が、いつも心の中で叫んでいます。引き裂かれた二つの自分が、いつか一つになれることを夢見て。

福島から学び、同じ過ちを繰り返さぬよう、私たちは出来ることの限りを尽くしたいと思えます。皆様とつながって力を蓄えたい。私たち避難者にも出来ることはあります。避難者で立ち上げた、「つながろう、放射能から非難したマーマネット@東京」は、福島の子どもを守るため、非難した子どもを守るため、ささやかですが、目に見える活動を進めています。皆様、どうぞ一緒につながってください。今日はありがとうございました。



菅野正寿さん
NPO法人福島県有機農業
ネットワーク理事長

こんにちは。私は原発から五〇キロの福島県二本松市で、米、トマト、麴の加工などをやっています。菅野正寿です。よろしくお願ひします。

原発によって、放射能の拡散により、福島の里山、農地、海が、ことごとく汚染されてしまいました。とりわけ私たちは有機農業者にとつて大事な、落ち葉、わら、堆肥が本当に使えるのか。地域資源循環型の有機農業が、大きな打撃を受けました。

子どもたちの命と健康のために、健康な作物、健康な家畜を育んできた有機農業者の苦しみは、ことのほか深刻です。津波で家も農地も流されてしまった苦しみ、避難を余儀なくされている苦渋、そして自ら命を絶つた多くの農家の人達。私たちはこの苦しみを受け止めて、耕して種をまき、米や野菜を作ってきました。その結果、実は、福島県の米や農産物には、予想以上に放

放射性セシウムが移行しないことがわかってきました。それは福島県の土壌は粘土質が多くて、粘土質プラス有機物が、セシウムをしつかり土に固定化して、米や野菜が吸わないことが、有機農業学会の先生方と私たち農家の検証によって、明らかにできてきました。

夏のきゅうり、トマト、ナスなどは、○から二〇ベクレル。秋の大根、ニンジン、白菜なども○から三〇ベクレル。米は九五パーセント以上が一〇〇ベクレル以下です。

ただ残念ながら、柿、梅、栗、柚子などの果樹類、あるいはネギ類は、一〇〇から一五〇ベクレル以上出てしまいます。きのこ類は、菌種がセシウムを取り込みやすいということ、高く出てしまいました。

私たちは農家が自ら、自分の田や畑で検証して、放射能が高く出たもの、低く出たものをちゃんと、一年間の積み上げを、しっかりと消費者の皆さんにお伝えしていきたいと思えます。

しかし、わずか○・数パーセントの玄米などから五〇〇ベクレル以上が出てしまったた



めに、センセーショナルにマスコミが報道しています。福島は米は食べられないという報道に、怒りを持っていきます。わらの問題、花火大会の中止、すべて福島県民が加害者のようなマスコミの報道に、私は怒りを持っています。

いま基準値が五〇〇から一〇〇に下げられようとしています。私は福島の一年度の検証をしつかりと反映する、主食である米や野菜は五〇ベクレル以下でもいい、ただ出やすいものは、そのきめの細かい基準値を、福島を検証を基にして作ってほしいと思っています。

私たち農家は、自分たちが食べられるもの、孫に食べさせるものを作って、消費者の皆さんに届けてきました。私たちの台所の延長線が、消費者の台所です。ですから今回の放射能問題でも、私たちが食べられるもの、孫たちが食べられるものを、まず皆さんに届けなければならぬ。

そのためには福島県が、学校給食に地元の野菜を出荷させる、まず福島県の私たちが食べて出荷することが、皆さんへの信頼につながると思います。そのために福島再生に向けてがんばっていきたく思います。

もう一つ。私は持続可能な社会、原発にたよらない新しい社会を、農村も、生産者も、消費者も力を合わせて、ともに作っていきたく思います。林業、漁業、農業という第一次産業が、持続可能な社会であると思えます。そのために、皆さんと力を合わせて、いま変えなければならぬ。いまが時代を変えていく転換点だと思つて、ともに持続可能な社会を作ること強く訴えて、私からのあいさつとします。

山本太郎さん

俳優

すごい人ですね。わく。感動しちゃいますね。いや〜これだけ寒いのに。

建国記念日ですつて。本当にこの国を愛している人達が、いまここに集まっていますよ。普通、来ないですよ。大手メディアの流す情報を信じていれば、ここにはいない。でも、本当のことが見える人たちが、こんなにくささんいるのですよ。勇気をもらいますよ。本当にありがとうございます。

三・一一。あれから一年近く経とうとしているのですよ。ね。すこしは、ましな国になっているのですかね。その自信、なにか手ごたえみたいなものを、皆さん感じていますか。

電力は余っているのですよ。ウソをつかれていたのですよ。ね。僕たち。原発五四基あるうち三つだけです。動いているの。東電管内は一基だけです。九州も四国も脱原発です。余剰なのです。それをなぜウソをつくの。よほど大きな利権構造なのですね。

でも、あきらめるわけにいかないですよ。命がかかっていますもん。あきらめるのは、あつちですよ。もつともつと、声を上げませんか！ 怒りませんか！ みなさん。いま一番必要なことは大手メディアの情報しか流れてこない人たちが、いまだに無関心であるということです。

「収束したのでしょうか」「放射線は大丈夫なのでしょう、一〇〇ミリまで」、平気で聞かえてくるのですよ。おかしいですね。怖い話ですね。

もちろん、ここに集まっている皆さんは、一生懸命に仲間を増やしていこうとされている方々だと思います。でもそれを、もつとテンポアップしていかないと、間に合わないかもしれない。地震の活動期ですものね。地震、津波の想定、原子力発電所のもので、データラメだということが、はっきりしたので、急がないといけませんね。

もしも次にどこかに大きな地震が来たら、この国は終わってしまいますよ。この国を終わらせるわけにはいきませんよ。再稼働なんてさせる



わけにはいかないのですよ。エネルギーは余っているから。一刻も早く、高汚染地に住む子ども達が避難ができるように、避難の権利を、国がさっさとお金を払えと、皆で国会議員のお尻を叩きましょうよ。そして放射性廃棄物。びっくりしましたね。バグファイル付けたら大丈夫だって。大ウソですよ。放射性物質による実証実験、されていなかったのですね。よくそんなことができませんね。一体、なにがしたいのか。がれき利権を全国にばらまきたいだけですよ。がれきの山は、宝の山なのです。産廃業者にとっては。だったら震災で経済的に圧

迫されている土地、土地にサイトを作って、そこで処理をして、地元で雇用を生んで、お金を回すようにするべきではないですか。

いま本当のことを見つけている大人。ここにいる皆さんが、もともととテンポアップしていった、本気になっていけば、間に合うかもしれない。この国を終わらせないために、もともとと怒って、もともとと声を出していきましようよ。即時廃炉ですよ。それ以外に選択はない。

残り一分つて出ましたけれど、もう少し話をさせてください。

先ほど、ドイツの方と話をしました。ドイツでは福島に東電事故を風化させないために、今日、一五〇の街で大規模なデモ行動が起こっているのですよ。抗議行動をしているのですよ。世界中が、僕たちに勇気を与えてくれてます。事故の当事者である僕たち。もともとと力を入れてがんばっていきましようよ。

世界中が見ていますよ。日本人は何をしているのだと。このままでは、世界を巻き込

む事故になってしまいました。ドイツにできて、日本にできない理由なんてないですよ。見せてやりましようよ。日本人の底力を。がんばっていきましよう。

そしてもう一つ。世界は見ているといいました。いまアルジャジーラが密着しています。アルジャジーラのカメラマンの方が来ています。どうぞ来てください。皆さん、いいですか。アルジャジーラは世界中に流れています。世界中が思っているのです。日本政府のつくウソを、「ウソつきだな」程度にしか思っています。でも日本人は何をしているのだと、日本人はどうして声を上げないのだと、世界中が見ています。

このアルジャジーラのカメラを通して、日本人はこのぐらい怒っているのだということと、シュプレヒコールでぜひ、アピールしたいと思えます。お願いします。

ありがとうございます。
(山本さんの音頭で、「げんぱつ いらぬ」のシュプレヒコール。)

藤波 心さん

タレント

東日本大震災から、あともう少しで一年が経ちます。三・一一以降、私の価値観は大きく変わりました。人類の歴史に残るような大きな事故なのに、大したことないことのように見せる国の姿勢や報道。検査も少ししかしていないのに、経済を守るための緩すぎ基準。食べて応援しようなんていう、人の命の重さを無視した無責任な、国を挙げてのキャンペーン。私は、これはすぐく怖いことだと思います。日本ってこんな国だったのかと残念な気持ちになりました。

いま日本は歴史上大変な危機に瀕していると思います。この狭い国土に、この地震の多い国土に、気がついたら原発を五四基も建ててしまっていた。これは繁栄の象徴ではなく、ただの时限爆弾です。もし、また、どこかで、大地震が起きて、別の原発が爆発するようなことがあったら、今度こそ、日本は終わりだと思います。いつ、爆発するかわから

ない、爆弾と一緒に生活するなんて、私は絶対に嫌です。美しい山や川、海。歴史ある街。おいしい山の幸や海の幸。

もう私たちの国土に、第二の福島をつくっては絶対にいけません。私たちはしょせん、ちっぽけな生き物です。どうやったら、地球の自然には勝てません。科学が発達したからといって、人類が何でもコントロールできると思ったら、大間違いです。自然の中に生きる私たちは絶対、自然を超えることはできません。こんな地震の多い国に、原発を造りまくるというのも、自然をばかにした、人類の驕りだと思います。



私たちは、原発によって支えられていたのではなく、何も知らない私たちが、原発を支えていたのだと思います。よく、経済がだめになるから、原発は必要だと言う人たちがいます。でも、いまの日本は、原発があるから、経済がだめになってしまっているように私には思えます。今こそ、本当の幸せとは何か、豊かさとは何か、考え直すときが来ているのだと思います。

いつも、最後にしわ寄せが来るのは、一般市民や弱い人、子どもたちです。皆さん、一人一人の力は、大きな力に変わります。子どもたちの明るい未来を、そして日本の未来を守ってください。よろしくお願います。

最後に、今日は「故郷（ふるさと）」を歌って、終わりたいと思います。



落合恵子さん

呼びかけ人

みなさん、こんにちは、落合です。

寒いでしょう、風邪引かないでくださいね。ここにたどり着くまでに、私は迷子になりました。見えているのだけれど、たどり着けなかった。けれども、脱原発、反原発は迷子にならず、まっすぐに、まっすぐに、まっすぐに歩いていきましよう。私たちの声は必ず届くはずですよ。私たちが諦めてしまったとき、この場で地団駄を踏んでしまったとき、私たちの思いは届かなくなるのだ、ということをお話させていただきます。自分自身と約束するためにお話をさせていただきます。先ほど、司会の方からありましたように、呼びかけ人の一人、鎌田さんは、今、新潟上越でお話をされていますが、六〇〇人の方が集まって、「さあ、これから東京のこのこと一緒に歩き出そう！」ということでお待ちになっています。私たちは「NO」を突きつけましょう。収束をしない



い福島第一原発を無理やり「収束」といったあの人に。

そして、私たちは「NO！」を突きつけていきましよう。また同じ事をどこかの国で繰り返すために、原発を輸出しようとしている人達に。

私たちは「NO！」を突きつけていきましよう。命を犯すものに、人生と人権を奪うものに。

私たちは心から「NO！」と行って、同時に、私たちが「YES！」といえる社会と時代を作っていきます。

命が大切にされる社会、人権が大切にされる社会。誰かの幸せのために誰かが不幸にならない社会。私たちの幸せ

が、誰かの幸せともつながっていく社会にむけて、一歩一歩、歩いていきましよう。私たちは、少数派であることを恐れませぬ。いつだって時代の先端を開いてきたのは、少数派なのです。ですから私たちは、誇りある少数派として、歩き続けていきましよう。

呼びかけ人をやってから、私はなぜか、選挙の応援演説みたいなものが身についてしまっていて、普通のしゃべり方が出来なくなってしまうのですが。

いきまですよ。私たちは、平和に向かつて、私たちは、反・脱原発に向かつて、そして、反・脱原発はこの国が抱えてしまった全ての原発的体質を変えるための一歩でもあるというところを、どうか心に刻んでいきましよう。

お年寄りが、「もう疲れた、お墓に避難します」なんていう社会ではならないはずですよ。みなさんがおっしゃったように、電気は足りています。何の心配もありません。

髪の毛もどんどん怒髪になつてきちゃって、皆さん、や

りませんかと怒りの髪で天を突いても良いし、地を震わせても構わないのですが、自分にも言い聞かせましよう。

私は、次の世代、次の世代、そのまた次の世代に少しでも胸を張って、でもこれまでのことに対して、ごめんなさいを込めて、前を向いて歩いていくのだ。

どこかの首相は、増税のためにネバー・ネバー・ネバー・ネバー・ギブアップとおっしゃいましたが、私達の言葉です。ネバー・ネバー・ネバー・ネバー・九九九回、ギブアップです。歩きましよう。さようなら。

